

## ミュージズ・フェスタ2023で開催した公開フォーラム報告

おおしま みつはる  
大島 光春(学芸員)

2023年3月11日、4年ぶりに再開したミュージズ・フェスタの中で、公開フォーラム「生命の星・地球博物館の新たな一歩を考える～みんなでつくる博物館・インクルーシブデザインの視点から～」を開催したので報告します。

### なぜ今インクルーシブ公開フォーラムを開催するのか？

2022年にICOM(国際博物館会議)で新しい博物館の定義が採択されました。私はその定義に使われた“inclusive”は重要なキーワードだと感じました。しかし、インクルーシブという単語は知っていても、博物館においてどういうことを指すのか、ユニバーサルとどこが違うのかがはっきりとはわかりません。博物館業界では、きっと私と同じようにモヤモヤしている人が多いに違いないと考え、この公開フォーラムを企画しました(表1)。

### 紙上追体験はムリ！

たった2時間のフォーラムでした。しかし、2ページで紹介して、フォーラムの内容を読者に理解していただくのはとても難しいので、エッセンスをギュッと凝縮してお届けすることにします。

### □塩瀬准教授「なぜ今、博物館にインクルーシブデザインが求められるのか？」

インクルーシブ(inclusive)という(英)単語はわかりにくいという声を聴きますが、日本語に訳して「包摂ほうせつ」としても、全然わかりやすくなりません。インクルーシブはそのまま受け入れることにして、逆の意味の排除(exclusive)をしないこと、というふうにと考えるとわかりやすいとのこと。「使わない人」「使えない人」「使おうと思わない人」に実際に製品やサービスを使ってもらい、観察や対話を繰り返すことによって、それらがうまく使えない理由を突き止め、課題解決に向けて行動するというのが、インクルーシブデザインの手法です。

目の見えない人と一緒に絵画(例はモナリザ)を鑑賞し、見えない人に絵の詳細な説明を試みると、普段自分が見えているはずなのに見過ごしている点が

多いことに気づくことがあります。見えない人に教えているつもりが、むしろ教えた人にとっても学びになることに気づきます。つまり、インクルーシブデザインでは、一方的にしてあげるというのではなく、みんなで話し合うことによって互いに学び、ともに発見することこそ価値があります。

博物館をはじめとする公共施設は、地域外から人が訪れる場所です。その来訪者を迎える最前線の場所がインクルーシブデザインを取り入れていると、来訪者は温かく迎えられたと感じます。だから、博物館は地域の最前線として誰も排除しない場でなくてはならないのです。「ために」ではなく「ともに」という、一人ひとりが当事者として参加する姿勢が大切です。

### □佐藤学芸員「生命の星・地球博物館におけるこれまでの取り組み」

神奈川県立博物館が1967年に開館し、28年後の1995年に自然系が分離独立して神奈川県立生命の星・地球博物館が開館しました。「柵がない」ため「標本に手が届いてしまう」展示の結果として「触れる展示さわ」が実現しました。そのことが視覚障がい者の間で話題になり、そうした方々のリクエストにこたえる形で対応することになりました。分身ロボット「OriHime」やアバターロボット「newme」の実験を行ったものの、人的資源・予算・設備などの問題を解決できず、すべて実証実験段階に留まっています。現在は特別支援学校や院内学級へのリモート遠足など、医療的ケア児・者への対応にも取り組み始めています。

改正博物館法にも明示された学校教育・福祉・利用者や地域などと連携するソーシャルインクルージョンへの新しい取り組みをしなければならない反面、博物館の根幹的な業務(資料収集・調査研究・教育普及)はおろそかにできません。新しい取り組みを始めようとしたら、それに見合うだけの人・資金・場所・時間・ノウハウ・連携先が必要です。まもなく28年目を迎える当博物館はこれら

表1. 当日のプログラム

|       |   |
|-------|---|
| 13:30 | 館長挨拶 平田大二   |
| 13:35 | 趣旨説明 大島光春(学芸員)  |
| 13:40 | 「なぜ今、博物館にインクルーシブデザインが求められるのか？」<br>塩瀬准教授(京都大学総合博物館 准教授)                |
| 14:00 | 「当館におけるこれまでの取り組み」<br>佐藤武宏(企画普及課長・学芸員)                                 |
| 14:10 | 「盲学校出前授業の取組からの学び」<br>田口公則(学芸員)  |
|       | (休憩)  |
| 14:40 | 「多様な人と共につくる博物館事例～生命の星・地球博物館ワークショップ事例報告～」<br>山田小百合氏(NPO法人Collable代表理事) |
| 15:00 | 対談 これからの「生命の星・地球博物館」の30年を考える<br>登壇者 塩瀬准教授・山田小百合氏<br>佐藤武宏・田口公則・大島光春    |
| 15:30 | 閉会のことば 大島光春   |

の解決に向かいつつ、インクルーシブに関する次のステップを考える時期にあります。

### □田口学芸員「盲学校出前授業の取り組みからの学び」

対話と共感を基に生徒に寄り添うことが、子どもたちの主体的な学びを促すヒントになると考えています。盲学校の生徒の「触る観察」はモノの認識です。このプロセスを効果的に行うには、時間をかけて部分から全体へ理解を広げていくこと、言葉での説明と触覚を組み合わせることでイメージを紡ぐことなどが重要です。また、参加者の様子を観察しながら、対話を重視して進めるには、少人数の方が呼応しやすいため、生徒は4人までが適当です。

このアプローチは、博物館での講座にも応用しており、たとえば、貝殻を触って形を把握する活動では、参加者との対話と共感が重要な要素となっています。

### □山田代表「多様な人と共につくる博物館事例 生命の星・地球博物館インクルーシブワークショップ事例報告」

公開フォーラムに先立ち、2月19日に開催されたインクルーシブワークショップ(以下、WS)では、「インクルーシブデザインで博物館の魅力(再)発見する」ことを目的としました。初めて展示室を

見学したときに「3階から大きな1階展示室を俯瞰できることが大きな特徴だ」と感じました。WSでは、ここを含めて4つの展示(エントランス、アンモナイトの壁、大きな板根、3階から1階展示室を見下ろせる場所)を設定し、それらのうち3か所を選び、視覚障がいのあるリードユーザとともに展示室をめぐり、対話型の鑑賞を行いました。教室に戻ってから特に印象に残った1か所を選び、言葉でその展示のイメージが浮かぶような紹介文を作成し、各グループの紹介文を朗読して、共有しました(図1)。一連の活動で見られた全体的な特徴として、山田さんは次の3つをあげました。①一番触れない3階からの景色の言語化が人気! ②学芸員さん展示室ではようしゃべるのにグループ活動では逆に言葉がつまりがち、③同じ場所を見ても生まれる言葉は別々。

筆者にとっては「障がい者対応が中心にはなっているけれども、それだけがソーシャルインクルージョンの活動ではなく、あるテーマからエクスクルージョンされてしまう人をリードユーザに迎えてプロジェクトを作っていくもの」ということを実体験し理解できたWSでした。



図1. 公開フォーラムに先立って開催したインクルーシブWSの様子。

□対談:「インクルーシブデザインの視点から、これからの30年を考えてみる」(図2)  
※紙面の都合で対談の内容から特に重要な言葉だけ抜き出しました。

塩瀬: 世界から来てほしいと言っているのに、ある人には来なくてよいよというムラハチーブ(村八分)な博物館・美術館でいいんですか? 「うちのまちには来なくていいよ」ということなら別ですが、そうでないなら来訪者にとっての最前線の博物館は、「インクルーシブミュージアムにしていきましょう」ということです。



図2. プログラムの最後に行われた対談の様子。各講演をもとに掘り下げることができました。

山田: 徳島県博の例で印象的だったことは「学芸員さんがすごく変わった」ことです。集中してWSを行ったので、学芸員さんの中で気づき、意識の変化があったのだと思います。

田口: 目の見えない人にとって空間の把握は難しい。例えば、木々からなる山の場合、杉しか知らなければ山が杉山になってしまう。しかしWSではリードユーザの応答が良く、十分に空間を共有できたと感じました。

佐藤: 対話するといっても、言葉で表現することができない人や、そもそも興味がない人もいますよね。

塩瀬: しゃべる、紙に言語化する、絵で描く、など人によって得意な表現が違うので、WSではいろいろなアウトプットの仕方をすべて入れておくようデザインしています。対話の時間と種類をたくさん持つのが大事。そうでないとよく知っている人と声のかい人、偉そうな人に話が引張られてしまう。小さな声でも本当に大事なことをみんなで見つける、というのがみんなのまちの作り方。

### アンケートから

公開フォーラム終了時、参加者の方々に紙とオンラインでアンケートをお願い

しました。回答数は合計33件。男性61%、女性36%、無回答3%。年齢は50代34%、60代18%、20代15%、40代と70代が12%。職業は展関連事業者28%、博物館関係者24%、学生12%、その他15%。参加の目的は複数回答で「インクルーシブデザインについて知りたかったから」と「インクルーシブデザインに関する「生命の星の取り組み」について知りたかったから」が21%、「自分の所属する団体や館でもインクルーシブデザインを取り組みたいと思っているから」が14%、「インクルーシブデザインの取り組みに対して自分ができることを考えたかったから」が12%(図3)。また、満足度では「非常に良かった」33%、「良かった」52%でしたが、オンライン参加の方の半分の方からコメント欄に「音が聞き取りにくかった」あるいは「聞き取りにくかったので、良かったに下げました」とありました。「非常に良かった」理由としては、「整理できた」「意味がわかった」「取り組みの事例を知ることができた」「考えが深まった」「社会として当たり前にあるべきだとわかった」などのコメントがありました。多くの参加者の理解を深めることができたようです。おかげさまで、企画意図、目的は達成できたと感じています。

### おわりに

当館はこの公開フォーラムをきっかけに、インクルーシブミュージアムへの取り組みを始めたわけですが、対話の継続ができないと始めた意味がありませんし、成果も期待できません。他の博物館や地域など、多くの方々を巻き込んで、続けていきます。一緒にインクルーシブミュージアムへの道を歩みましょう!

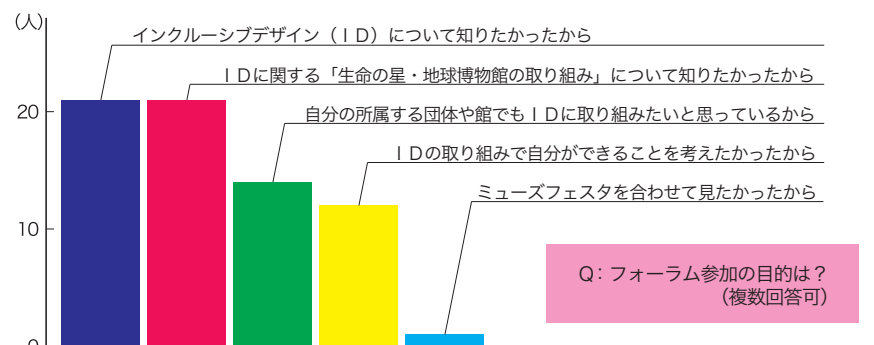


図3. アンケート結果の一部(問2)。